

# (1) 被服学関係

お茶の水女子大学教授 矢部章彦

全分野のうちでも出色のものであろうと信ずる。今後この成果をさらに飛躍的に進展させるため、関係者の一その精進に期待したい。

## 1. 展望の基盤

基礎ならびに応用の各分野と複雑に入り組んでいる家政学研究成果を、活発に動きつつある現段階で完全にとらえることはなほはだ困難である。

討論ならびに反省の具体的資料として、家政学雑誌(1957~1966)、繊維製品消費科学(1960~1966)の2誌にあらわれた被服学関係の全論文を分類整理して、最近十年間における研究の動向をまず紹介し、関連する海外研究についても一部紹介を試みる。上記2誌の部門別報文数はつぎのとおりである。

## 2. 分類別内容についての若干の紹介

- a 各部門の主要成果
- b 研究者の分布と研究層
- c 研究内容の粗密とその原因
- d 他学会誌・紀要等における成果
- e 外国における成果

	家政誌	織消科誌	計
1. 被服材料学	56	28	84
2. 被服整理・染色学	134	36	170
3. 被服衛生・機構学	42	10	52
4. 被服構成学	60	15	75
5. 被服美学・服装史	10	-	10
6. 服飾美学・意匠学	32	-	32
7. 消費科学・その他	4	14	18
	338	103	441

## 3. 被服学研究の問題点と将来

自然・人文・社会・芸術の各専門分野と密接に関連しつつ、しかも被服の立場でこれを統合して“着用する人間”に主体性をおいた被服学の研究方法、研究範囲、さらに家政学の目標とするところとの均衡、などについて、問題を提起する。

### a 被服学における基礎研究と応用研究

方法的にみて、各分野の研究はそれぞれ関連する基礎研究とのより深いつながりを意識して研究を進めるべきである。また同時に各分野の融合統一を常に念頭におかねばならぬ。(消費者運動との一線)

b 被服学における融合研究 被服構成を一つの頂点とするもの、繊維製品の消費科学をカナメとするもの、被服管理を焦点とするもの、など各部門の成果をさらに統合・融合した研究が芽生えねばなるまい。

c 研究における協力体制の確立 研究部会の設置、講習会・討論会の開催、会誌の拡充(月刊、総説・文献抄録)による連絡の強化など。

d 若年研究者の養成 計画的養成の困難な現状に対する反省と対策。

4. 結言 戦後20年の家政学の歴史において、家政学の名のもとに結集された被服学の研究成果は、家政学